



| | |
|--------------|---|
| Title | 事物の状態・性質を表す「する」の意味拡張：英語動詞 "have" の主体化との接点 |
| Author(s) | 大神, 雄一郎 |
| Citation | 言語文化共同研究プロジェクト. 2019, 2018, p. 1-10 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/72787 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

事物の状態・性質を表す「する」の意味拡張 —英語動詞“have”の主体化との接点—

大神雄一郎

1. はじめに

動詞「する」を述部に用いる日本語の文には、例として「彼女は青い目をしている」や「彼は穏やかな性格をしている」というように、「XはYをしている」という形式で人間やその他の事物の状態・性質について言い表す用法が認められる（影山 1990, 2004, 2009; 森山・梅原・富永 2015; 大西 2016; 佐藤 2003, 2005; 澤田 2003; 高橋 1975; 角田 1991, 2009 など参照）。この用法の文は、典型的には「誰かが何かを行う」というような「行為」や「活動」の意味を表すと考えられる「する」を用いながら、動作的な事態を述べるのではなく、言及される対象の有り様を描写する点において特徴的である¹。

本稿は、問題となる文のタイプを「状態・性質を表す「する」構文」と呼ぶこととし、その意味の成り立ちに動詞「する」の「主体化」（Langacker 1998 など参照）が関わっていると考えられることを述べる。ただし、ここではこの構文の性質と成立メカニズムについて包括的に論じる余裕はない。詳細の分析と考察は稿を改めて行うこととし、「XはYをしている」形式の文が状態・性質の意味を表すうえで動詞「する」が果たす役割について理論的な仮説を提案するところまでを本稿の目的とする。

以上のことを念頭に、第2節では本稿が考察対象とする構文の一般的な性質について示したうえで、動詞「する」の意味的拡がりや連続性について確認する。第3節では英語の動詞“have”の主体化に関する議論を概観し、第4節で主体化の考え方が状態・性質の「する」にも適用可能であると考えられることを述べる。第5節に本稿の提案および課題と展望についてまとめる。

2. 状態・性質を表す「する」構文と動詞「する」の意味的拡がり

ここでは初めに、状態・性質を表す「する」構文の基本的性質について確認しておく。まず、(1)の例に示されるとおり、問題となる構文の表現は述部を「する」の形式に置き換えることができず、常に「している」の形式を求めるものである。

- (1) a. 彼女は青い目をしている。
- b. *彼女は青い目をする。

¹ 参考として、『精選版日本国語大辞典』は「「ある」が存在性を叙述するのに対し「する」は最も基本的に作用性・活動性を叙述すると見られる。」としている。

また、この種の文の Y 項に置かれる名詞には、形容詞などの修飾要素を伴うか、言及対象が何らかの特徴を持つものであることを示すような複合語であることが求められる。

- (2) a. 太郎は {眠そうな瞼 / (ぱっちりした) 二重瞼 / *瞼} をしている。
- b. 花子は {かわいい鼻 / (魔女のような) 鉤鼻 / *鼻} をしている。
- c. 次郎は {立派な耳 / (堂々とした) 福耳 / *耳} をしている。

このように、問題となる構文は専ら「している」形の述部をとり、言及対象となる事物の特徴的な部分や側面を描写するものと考えられる²。なお、佐藤 (2003) などの先行研究に倣い、ここでは「Y をした X」(青い目をした少女) あるいは「Y をしている X」(青い目をしている少女) の形式による連体用法の文も当該の表現に含めることとする。

状態・性質を表す「する」構文の言及対象となる要素、つまり Y 項に置かれ得る事物には、大まかに、有生物の身体部位(3)や内面的性質(4)、無生物の構成部位(5)や物理的性質(6)、対象に対する経験者の知覚・感覚的評価など(7)が想定される。

- (3) a. 太郎はたくましい二の腕をしている。
- b. 花子はしなやかな体つきをしている。
- c. あのライオンは立派なたてがみをしている。

- (4) a. 太郎は温和な人柄をしている。
- b. 花子はやわらかい物腰をしている。
- c. うちのネコは人懐こい性格をしている。

- (5) a. その邸宅は堂々とした面構えをしている。
- b. このボトルは細い首をしている。
- c. あの車はかわいいお尻をしている。

- (6) a. このグラスはかわった形をしている。
- b. 彼の車は珍しい色をしている。
- c. イタチはネコと同じくらいの大きさをしている。

- (7) a. キリマンジャロコーヒーは酸味の強い味をしている。
- b. この魚は腐ったような匂いをしている。
- c. シタールという楽器は低くて重厚な音をしている。

² 影山 (2009)はこの構文の文法的ふるまいについて詳細に論じており、議論の深化に向け参考となる。

- d. このタオルはフワフワした触り心地をしている。
- e. あの銘柄のワインはまるやかな口当たりをしている。
- f. その品種の梨はシャキシャキした歯触りをしている。

このように、本稿が考察対象とする表現は、特有の制約を伴いつつも様々な事物の状態や性質を広く描写するものと言える。

先に第1節でも述べたとおり、ここで注目すべきは、動詞「する」を用いた文が対象の有り様に関する意味を表す点である。しばしば「なる」的な言語（寺村 1976; 池上 1981; 影山 1996 など参照）であるとされる日本語において、この現象は興味深いものと言えよう。それでは、このように「する」を述部に置く文が静態的な意味を表す背景には、どのような仕組みが考えられるだろうか。このことに関し角田 (2009)は、問題となる構文の表現のうち人間の身体部位および内面的性質に言及する例を「所有」の表現として分析し、これを含む「する」の複数の用法に連続性を指摘している。次の例を参照されたい。

- (8) a. 太郎はネクタイをしている
- b. 太郎は怖い顔をしている。
- c. 太郎は明るい性格をしている。

角田 (2009)によると、(8)に示されるそれぞれの「する」の用法は、全体・部分関係が問題とされるか、ヲ格に示される名詞に修飾要素が必要か、テンス・アスペクトに制限があるか、という点において異なるふるまいを示すものであるが、各用法の文の形態・統語・意味を見渡すと、これらには連続性が認められる³。簡単にまとめると、(8a)の「ネクタイをする」と(8b)の「怖い顔をする」の間には、前者では全体・部分の関係に基づくと言えるかどうか疑問符が付くのに対し後者には全体部分関係が認められる点、また、前者は修飾要素を求めないのに対し後者ではこれが必要な点に違いが指摘されている。そして、(8b)の「怖い顔をする」と(8c)の「性格をする」の2通りのタイプに関しては、前者ではテンス・アスペクトの制限がなく動作的な局面が表されるが、後者ではこうした点に制約が伴うとされている。このようなふるまいの違いは認められるものの、角田 (2009)は「ネクタイをしている」などの着用の「する」と「明るい性格をしている」などの所有の「する」は連続的に位置づけられるものという見方を示し、これらについて「全く無関係とは言えない」と述べている（角田 2009: 149）。

本稿は上に見たような角田 (2009)の考え方を基本的に支持し、状態・性質を表す「する」構文の表現は「ネクタイをしている」のような用法の表現と何らかの関係を持つものと考

³ 角田 (2009)は角田 (1991)を土台とするものである。角田 (1991)では(8a)の「する」と(8c)の「する」は別の動詞であるという見方が示されていたが、角田 (2009)はこれを改め、本稿で参照した見方をするべきことを述べている。なお、角田 (2009)は「木を切る」のような「する」を伴わない動詞文も(8a)から(8c)の各文と連続的であるとしている。

える立場をとる。ただし、角田 (2009)では行為や活動に基づく「する」の意味が状態・性質の意味を表すに至るメカニズムについて具体的な説明は示されていない。このことを念頭に、本稿は状態・性質の意味を表す「する」の意味が「する」の他の用法とどのように関連しているのか、という問題について理論的観点から検討を行う。

3. 英語 “have” の主体化について

動詞「する」を述部に用いる文が状態・性質の意味を表す背景について、本稿は認知文法において提案される「主体化」の発想から説明可能と考える。こうした見方をとるにあたり、ここでまず確認しておきたいのが、状態・性質を表す「する」構文の表現は動詞“have”による英語表現に意味的に対応するものと考えられる点である。このことは、辞書の記述において(9a)から(9c)に挙げられるような英語の例文に括弧内に示されるような和訳があてられていることから確認される⁴。

- (9) a. Annie has blue eyes. (アニーは青い目をしている。)
b. Mary has silken hair. (メアリは絹のような髪をしています。)
c. She has such a pretty face. (彼女はとてもかわいい顔をしている。)

(9)の英文と和訳を見比べると、一般的には「持っている」という訳語があてられることが多い“have”が単語のレベルでは一般的に“do”などに置き換えられやすい「する」による表現を用いて訳される点にギャップが感じられるかもしれない。ただし、これらの日英語の文が描写する内容には対応性が感じられ、また、両者の間には他動詞文の形式で対象の有様を表すという点にも共通性が認められる。状態・性質の意味を表す「XはYをしている」形式の日本語文が全て英語の“have”構文に置き換えられるわけではないものの、両者の間には部分的ではあれ明確な並行性が見て取れよう。

上記のことをふまえつつ、英語における“have”の用法の拡がりについて概観のうえ、問題となる(9)のような用法の位置づけについて確認する。次の例を参照されたい。

- (10) a. Watch out — he has a knife! (Langacker 1995: 64)
b. I have a chain saw, in case I should ever need one. (ibid.)
c. She has a substantial income. (ibid.)
d. He often has migraine headache. (ibid.)
e. I have brown eyes. (ibid.)
f. They have a lot of armadillos in Texas. (Langacker 1995: 73)

(10)の各文は、いずれも動詞“have”を用いた文であるが、それぞれにおいて“have”が

⁴ 『ジーニアス英和大辞典』より。

表す意味は少しずつ異なる。Langacker (1995)によると、(10a)では主語の指示対象が目的語の指示対象を直接的かつ物理的に支配しているという所有状況が表されるのに対し、(10b)で表されるのは必要に応じて主語から目的語への物理的なアクセスが可能となり得るような形での所有関係である。(10c)ではこうした所有の関係性はさらに抽象的となる。そして、(10d)では主語の指示対象が目的語に示される対象に対して何ら支配力を持たない形での関係が示され、(10e)では主語は目的語の位置を特定するための参照点 (reference point) としての役割を担うのみとなる。さらに、(10f)で表されるのは主語と目的語の間に何らかの関連の可能性が示される、ということと考えられる。

Langacker (1995)は、(10a)から(10f)のような“have”の用法を連続体 (spectrum) と捉えたうえで、それぞれの用法には[1]物理的あるいは抽象的な「支配」(control)、[2]動詞による関係性の描写、[3]主語/目的語に対するトラジェクター/ランドマークの割り当て、といった意味、あるいはその「痕跡」が通底するとしている⁵。こうした見方をもとに、Langacker (1995)は(10)に示される“have”の複数の用法を見渡したうえで、これらはいずれも「参照点構造」(reference-point structure)、すなわち、事態を概念化する主体が目標物を同定する際に何らかの対象を「参照点」(reference point)として用いる、という認知的構造を共有するものとの見方を示している。(10)の各文に示されるような“have”はいずれも、主語の指示対象と目的語の指示対象の間の何らかの関連性を前提に、主語の指示対象を参照点に目的語に示される要素を特定する経路として示される関係を表している、と考えられるわけである⁶。

上記のような参照点構造の考え方を前提に、早瀬 (2002)は問題となる“have”の用法について、認知文法において提案される主体化の観点から検討している⁷。主体化とは、概略、事物の間の客体的な関係に関する意味が背景化し、そこに内在する根源的な意味が経験者の主体的な捉え方を通じて前景化する、という意味変化を指すものであり、客体的意味が段階的に希薄化する現象として規定されるものである。早瀬 (2002)は、(10)に示されるものと実質的に同じ“have”の用法の拡がりを提示したうえで、それぞれの用法に想定される「参照点から目標物を迎える経路」の在り方について大局的に整理している。これによると、(10a)のタイプが「客観的に存在する関係を利用する」ものであるのに対し、(10f)のタイプは「発話者の心的な迎りだけ」となっている。(10a)のような文における“have”

⁵ “have”のような動詞による所有の意味の根源には、物理的対象を自身の支配下に置いて扱う、という意味を表す“grasp”や“hold”のような動詞が想定される (Langacker 1995: 63-64)。この話題に関しては合わせて Heine (1997)も参照されたい。

⁶ 西村 (2004)は(10e)のような“have”の用法と日本語の二重主語構文に並行性を指摘している。

⁷ Langacker (2000)は(10)と同種の表現群を「文法化」(grammaticization)の例として挙げ、これらについて、主語による支配 (control) の希薄化を示す現象として論じている。なお、ここでは紙幅の都合から詳しく紹介することができないが、早瀬 (2002)の主旨は Langacker (1995)などによる参照点構造の考え方を前提にしつつ、その内実についてより詳細に規定したうえで、英語の所有表現をプロトタイプ理論とスキーマ理論の観点から包括的に説明づけることである。参照点構造の考え方をもとに所有各表現の成立要件について掘り下げた検討を行う早瀬 (2002)のアプローチは、状態・性質を表す「する」構文の拡がりや制約について特定する際に参考となると考えられる。

は参照点となる主語が目標物である目的語に対して物理的な支配力を行使しているという客体的な関係を表すのに対し、(10f)のような文における“have”ではそうした客体的意味は希薄化し、主語と目的語は話者（事態の経験者）による主体的な関係性の読み取りを通じて結ばれると考えられることとなる。両者の間に位置づけられる各用法においては、順に客体性の希薄化、すなわち主体化が進むと考えられ、(10a)から(10f)へと向かう“have”の意味的推移は主体化現象として捉えられる。この中で(10a)が最も客体的な意味を表す用法であり、対して(10f)が最も主体的な意味を表すものと見なされる（早瀬 2002: 179-181 参照）。

ここで重要なのは、(10)に挙げた各用法の“have”の意味には客体性の度合いに違いが認められるものの、いずれにも「参照点からターゲットへの心的アクセス」という基盤が共有される点である。こうした共通要素は“have”構文のスキーマと考えられる。このように、(10)に示される各文では主語の指示対象と目的語に示される要素の関係は異なるが、いずれの用法にも“have”のスキーマ的な意味が通底すると考えることが可能である。ここでは、上記のように(10a)から(10f)に想定される客体性の抽象化現象を「支配力の主体化」と呼ぶこととする。

4. 状態・性質の意味における「する」の主体化

Langacker (1995)および早瀬 (2002)の説明をふまえると、“have”における(10e)のタイプの表現は、参照点構造を前提に(10a)のタイプの表現から主体化を経て成り立つものということになる。先に触れたとおり、(10e)の文は本稿が考察対象とする状態・性質を表す「する」構文の表現に対応すると言えるものであるが、本稿は“have”における(10a)から(10e)までの用法の拡張と類似した関係が、具体的な行為・活動の意味を表す「する」から角田 (2009)のいう着用の「する」(8a)および所有の「する」(8c)の拡張にも想定されると考える。

上記の考え方について、行為・活動を表す「する」の用法である(11)および(8a)と(8c)の例（再掲）を通じて確認したい⁸。

(11) 太郎は部屋の掃除をしている。

(12) a. 太郎はネクタイをしている

b. 太郎は明るい性格をしている。

(11)は「太郎」が「掃除をする」という行為・活動の進行状態、(8a)は「太郎」が「ネクタイを（装着）する」という行為・活動の結果状態、(8c)は「太郎」が「明るい性格を持つ

⁸ (11)のタイプの文は角田 (2009)においては触れられていないが、本稿はこの種の文も問題となる現象に関わっていると考える。なお、先に(8b)に挙げた「太郎は怖い顔をしている」には「太郎が怖い顔を意図的に作っている」あるいは「太郎の顔つきはもともと怖い」という2通りの解釈が想定され、前者の解釈は行為・活動の「する」、後者の解釈は状態・性質の「する」に基づくものと考えられるが、ここでは議論を簡略化するためこの用法に関する説明は割愛する。

ものとして存在する」という単純な状態を描写していると考えられる。ここで、第1節に述べたように動詞「する」の基本義を行為・活動に伴う動作的意味と考え、(11)、(8a)、(8c)の各タイプの文を見比べると、それぞれの文の意味には動作性の程度において違いが認められる。(11)は「太郎」による具体的な行為・活動の進行状態を述べるものであり、最も動作的な意味を表す表現と言える。(8a)は「太郎」による行為・活動そのものを捉えて述べるものではないが、その結果として得られた状態、すなわち「ネクタイの装着」という行為の結果として生じる「ネクタイを着用した状態」を描写するものと考えられ、ここには動作性の痕跡が認められる。これに対して、対象の有り様を述べるのみである(8c)の背後には「太郎」による客体的な行為や活動は何ら想定されず、ここでは言及される事態の構成に現実的な意味での動作性は関わらない。

それでは、もはや現実的な意味での動作性が想定されない(8c)のような事態が、他の用法と同様に「する」という動詞によって言語化されるのはなぜだろうか。この問いに対し、(8c)においては主題として示される対象(太郎)がY項に示される要素(明るい性格)を意図的に、または能動的に獲得し、それを「持っている」あるいは「備えている」かのような捉え方が適用されることで、行為・活動の進行状態あるいは結果状態を表す(11)や(8a)と同様の表現形式がとられる、というのが本稿の見方である。つまり本稿は、ここでは動詞「する」に想定される動作性が主体的に読み込まれた結果、静態的な状況の描写に「XはYをしている」の形式が用いられるようになる、と考える。このように、状態・性質を表す「する」構文の表現は主体的に捉えられた行為・活動の結果状態として対象の有り様を描写するものと考え、この種の文が動作的意味を基本とする動詞「する」を用いて「XはYをしている」という形式をとることに説明が与えられる。角田(2009)が(8a)から(8c)の「する」に指摘した「連続性」を主体化の観点から説明づけることが可能となるというわけである⁹。対応する英語“have”の用法に認められた客体性の希薄化については支配力の主体化としたが、これに対し、ここで問題とする「する」における客体性の希薄化を「動作性の主体化」と呼ぶこととしたい。

状態・性質を表す「する」構文の表現に主体的な意味での動作性が関わっている、と見ることに対しては、前掲の(5)のような例から妥当性が示唆されるように思われる。

- (13) a. その邸宅は堂々とした面構えをしている。
b. このボトルは細い首をしている。
c. あの車はかわいいお尻をしている。

⁹ 影山(2004)は、(8c)のタイプの文における「する」を「身体属性文の「スル」」、(8a)のタイプの文における「する」を「装着動詞としての「スル」」として分類し、前者は「出来事項の抑制」という操作を通じて後者から派生するものという見方を示している。2通りの「する」に何らかの意味での関連性を想定する、という意味においては影山(2004)の発想と本稿の発想に共通するところはあるかもしれないが、影山(2004)が問題となる表現の成り立ちを語彙項目の意味構造から説明づけようとしているのに対し、本稿はこれを「捉え方」の観点から説明づけようとするものであり、この点において影山(2004)と本稿の発想は本質的に異なるものと考えられる。

実のところ、無生物の構成部分について言及する(5)のような表現は、従来の研究では問題となる構文の例として適格とならないとされてきたものである(影山 1990; 佐藤 2003 参照)¹⁰。しかしながら、無生物の構成部分を有生物の身体部位に擬えて述べる場合には、(5)のように適格な表現が成立する。この種の文は例外的なものと思われるかもしれないが、WEB 検索を行ってみると(12)のように様々な例が見つかる¹¹。

- (14) a. モンキーレンチは、クワガタのような頭をしているのが特徴で、自由に幅を変えることができ、六角になっているボルトやナットを回すことができます。
[https://shota-life.com/entry/tool_pikap5/]
- b. こちらの少しモダンな三階建ては、おそらく元遊郭ではあると思うが、近年に改築したのだろうか。それでも正面はとても重厚で見事な面構えをしている。
[<http://de-ossi.cocolog-nifty.com/blog/2018/09/post-9cfc.html>]
- c. ヴィオール属はヴァイオリン属と異なってなで肩をしているのが特徴です。
[<http://yugo-music.jp/article-6866.html>]
- d. 2.1kg とコンパクトなボディをしているため、様々な場所に持ち運んで掃除することが可能です。¹² [<https://minari-media.jp/articles/5607>]
- e. 軽自動車サイズながら踏ん張り感があり、迫力のある後ろ姿をしている。
[<https://style.nikkei.com/article/DGXMZO87591700S5A600C1000000>]

こうした例は、主題として示される対象が無生物であっても、これらに動作主性が付与される場合には状態・性質を表す「する」構文の表現が成立しやすくなる、ということを示唆するものと思われ、問題となる構文の成り立ちに動作的意味の影響を想定することの妥当性を裏付けるものと考えられる。

5. まとめ

以上、ここでは「XはYをしている」という形式により事物の状態あるいは性質について描写する表現を考察対象に、ここにおける動詞「する」の意味に注目して検討を行った。

¹⁰ ただし、近年では森山・梅原・富永 (2015)がこの見方の反例となる事実を指摘している。

¹¹ 例文は yahoo!検索により収集し、2019年3月に最終確認を行っている。ここでは収集事例の一部しか紹介できないが、類例は数多く認められる。こうした表現の成立にはイメージ・メタファー (Deignan 2007; Lakoff 1987; 鍋島 2016 など参照) が関わっていると考えられる。

¹² この例は掃除機の商品説明から得たものである。

ここでの確認内容として、状態・性質を表す「する」構文の表現が事物の有り様を言い表す背景には、行為・活動の意味を基本とする動詞「する」の主体化が関与していると考えられる。第4節では、これを動作性の主体化として提案した。この考え方により、「する」による複数の用法に連続性を指摘する角田(2009)の見方に理論的な説明が与えられるようになる。

第1節にも述べたとおり、ここでの取り組みは「XがYをしている」という形式の文が状態・性質の意味を表すうえで動詞「する」が果たす役割について検討することにとどまり、問題となる構文の実態について包括的に示すにはさらに多角的な検討が必要となる。特に重要な課題としては、状態・性質を表す「する」構文の制約について明らかにしたうえで、その要因を特定することが挙げられるだろう。この問題に対しては、当該構文の表現の拡がりをも的確に捉えたうえで、その文法的ふるまいについて観察し、言語事実に基づいての分析と考察を行うことが求められる。この課題については現時点において稿を改めての取り組みを予定している。

上記に加えて、状態・性質を表す「する」構文の表現と、これに対応すると考えられる英語“have”の表現について対照を行い、それぞれの特徴について詳細に明らかにすることも課題の1つに挙げられる。これにより、日英語における事物の状態・性質の捉え方に関し、一定の見通しを与えることが期待される。さらに、日本語のいわゆる二重主語構文の拡がりや、助詞「は」に示される主題の文法的・意味的機能などに視野を広げて考察を行い、関連する現象について理解を深めることが展望される。

謝辞

本稿は JSPS 科研費（課題番号：19K20789）の助成を受けて行われる研究に基づくものである。ここでの取り組みに関して、ご助言やご支援、また例文の適格性に関する意見収集などご協力をくださった早瀬尚子先生、田村幸誠先生、小栗哲哉先生、井原駿さん、桑原拓也さん、三野貴志さん、大谷修樹さん、浅野真菜さんにお礼を申し上げたい。

参考文献

- Deignan, Alice (2007) “‘Image’ Metaphors and Connotation in Everyday Language.” *Annual Review of Cognitive Linguistics* 5(1), 173-192.
- 早瀬尚子 (2002) 「英語所有各表現の諸相 プロトタイプ理論とスキーマ理論の接点」西村義樹(編)『シリーズ認知科学 2 認知言語学 I: 事象構造』161-186, 東京: 東京大学出版会.
- Heine, Bernd (1997) *Possession. Cognitive Sources, Forces and Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.

- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論』 東京: 大修館書店.
- 影山太郎 (1990) 「日本語と英語の語彙の対照」『日本語の語彙と意味(講座日本語と日本語教育第7巻)』 1-26. 明治書院.
- 影山太郎 (1996) 『日英語対照研究シリーズ(5) 動詞意味論—言語と認知の接点—』 東京: くろしお出版.
- 影山太郎 (2004) 「軽動詞構文としての「青い目をしている」構文」『日本語文法』 4(1): 22-37.
- 影山太郎 (2009) 「言語の構造制約と叙述機能」『言語研究』 136: 1-34.
- Lakoff, George (1987) “Image Metaphors.” *Metaphor and Symbolic Activity* 2(3), 219-222.
- Langacker, Ronald W. (1995) “Possession and Possive Constructions.” In John R. Taylor and Robert E. MacLaury (eds.) *Language and the Cognitive Construal of the World*. Berlin and New York: Walter de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. (1998) “On subjectification and Grammaticalization.” In: Lean-Pierre Koenig (ed.), *Discourse and Cognition: Bridging the Gap*, 71-89.
- 森山卓郎・梅原大輔・富永英夫 (2015) 「「属性シテイル構文」の構文文法論的考察」『認知言語学研究』 1: 156-175.
- 鍋島弘治朗 (2016) 『メタファーと身体性』 東京: ひつじ書房.
- 西村義樹 (2004) 「主語をめぐる文法と意味—認知文法の観点から—」尾上圭介(編) 『朝倉日本語講座 6 文法 II』 279-97, 東京: 朝倉書店.
- 大西美穂 (2016) 「全体-部分の談話構造と観察者—「目が青い」か「青い目をしている」か」『日本語用論学会大会発表論文集』 11: 193-196.
- 佐藤琢三 (2003) 「「青い目をしている」型構文の分析」『日本語文法』 3(1): 19-34.
- 佐藤琢三 (2005) 『自動詞文と他動詞文の意味論』 東京: 笠間書院.
- 澤田浩子 (2003) 「所有物の属性認識」『言語』 32(11): 54-60.
- 高橋太郎 (1975) 「文中にあらわれる所属関係の種々相」『国語学』 103: 1-17.
- 角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語』 東京: くろしお出版.
- 角田太作 (2009) 『世界の言語と日本語 改訂版—言語類型論から見た日本語』 東京: くろしお出版.
- 寺村秀夫 (1976) 「「ナル」表現と「スル」表現—日英態表現の比較—」『寺村秀夫論文集 II』 213-232, 東京: くろしお出版.